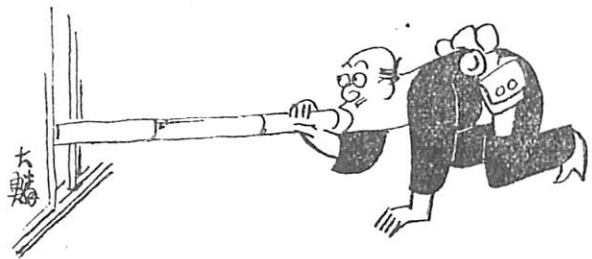


併し主家へはお差支へをさせませぬやうに代りを連れて参りましたから、どうかお暇をと、代りを連れて来て暇を取るのですから、イヤ應云ふ譯には不可ません、今まで居りました美やかな、おもよを歸して、その代りの女中を置く事となりましたが不思議な事には、この代りに参りました女中さん、年も十八、名前も同じくおもよさん、チツトも代りませんが、品物は丸ツ切違ふ、今度のおもよさんは脊がスラリと低い、色がクツキリと黒い、鼻がツンと後ろへ高い、その代りにデポ。ポ。ン。が出張して居る、頭の毛が少なうて、縮れて、赤ふて短かいと来て居る、八の字眉毛で、目尻が下つて鰐口で、鬼齒が生へて居る、頬骨が立つて居て、猪頸で、鳩むねで、出尻じりと云ふ、イヤ其れも出尻と云ふやうな、やさしいのやない、出けつ、其のけつも、今月、來月、再來月、伊達の對決、天下の豪傑雨宿りげつ、雨宿りげつといふとチヨットお解りになりませぬが、俄雨でも降つた時、この尻の下で三人位いは雨宿りが出来るといふ、實に立派なもので、それに足の太い事、太股から足の先まで、ズンペラポー、電柱みたやうな足で、足袋が十三文甲高、足袋でも別誂へ、中々足袋は履かんのので、年中輝が切て居る、去年の輝が切れ残つて、今年の轆が切れて、來年の輝がポチ／＼手廻しに切れてある、何の事は



ない、お正月のお鏡餅を土用すぎに出したやうに、ボン／＼と千割れがしてる、在所に居ると、百姓するので、裸足で畑へ仕事に参ります、その度ごとに輝の中へ、豆とか、麥とか、稗とか、或はあづきやか、いろ／＼な物が輝の中へ這入るので、春先になると、ポチ／＼と、輝の間から芽を吹いて来る、夏になると螢がとびだす、蛙が出る、大蛇が出る、狼が出る、山賊が出る、岩窟見たいな足元で、これで大阪へ奉公に出て來ましたが、何せ人一化九と云ふ、人間一分で、化物が九分、この化物のおもよさんが、別嬪のおもよさんの代りに参りました、それから三日経ちまして、九州へ商賣用でお越になつた若旦那がお歸りになりました、「へいお父つさん、只今戻りました」「オウ／＼倅か、えらい早う歸りなかつたなア、昨日の朝手紙が着きました、まだ兩三日は掛るやろと思ふて居ましたえらう早かつた、イヤ御苦勞ぢやつた……久七や、お前も定めし疲れて居らうな、どうぞユツクリ休んで下され……お清や、倅が歸りました、ナニツ風呂が沸いたさうぢや、倅や風呂が沸いた、疲れ息めに、一風呂這入つて來なされ、それから又ゆる／＼と話をするで」「そんなら、お父つさん、お先へお風呂を戴きます」と立つたがこの若旦那、お風呂へ這入るのが楽しみです、何故やと云ふたら、綺麗なおもよさんが手拭を持つて来て、若旦那、お背中を流しましょう、とやつて來るのが、何よりの楽しみにしてござる、デ早速風呂へ来て、温もつてござる、もうおもよが來るやろか……モウ來るやろか……と待てござるが、そりや却々來ません、又來る筈がない、國へ歸つて居んのや、若旦那、